



こころざし

【学校教育目標】
夢の実現に向かって たくましく
挑戦する児童生徒の育成

唐津市立加唐小中学校

第 15 号

令和6年11月21日発行

文責 校長 多久島 一仁

5. 6年生が修学旅行に行ってきました

11月13日（水）、14日（木）に長崎市へ修学旅行に行ってきました。2日間とも天気に恵まれ、昼間は半袖でも暑いくらいの陽気でした。呼子港から唐津駅まではタクシー、佐賀駅まではJR普通列車、その後、武雄温泉まではリレーかもめ、そして、長崎駅へ新幹線かもめで行くという交通手段でした。



今回の旅行では、職員が連れていくのではなく、子どもたちが駅のホームを探したり、地図を見ながら目的地まで私たちを先導したりするようにしました。初めての場所であるにもかかわらず、ほとんど間違えることなく、時間通りに目的地に着くことができました。方向感覚や観察力に優れていて、子どもたちの能力の高さを新たに知ることができました。

2日間で見学したのは次のとおりです。

○ 見学地

【1日目】平和公園・爆心地公園・長崎原爆資料館・原爆死没者追悼平和祈念館（被爆者の方の講話）・二の鳥居・長崎歴史文化博物館・県庁（夜景見学）

【2日目】26聖人記念館・めがね橋・中華街・大浦天主堂・グラバー園

今回の修学旅行で私が最も印象に残ったのは、被爆者の方（Yさん）の講話でした。Yさんは、大きく4つのこと（①子どもの頃の世の中 ②あの日長崎で何があったのか ③被爆者の願い ④願いはかなえられるか）を話されました。話されたのは、次のような内容でした。

- ① Yさんは爆心地から約4kmのグラバー園付近で、小学4年生の時に被爆しました。その当時は、「日本人ならぜいたくは出来ない筈だ！」と書かれたものを街で見かけるような時代で、パーマをかけることもぜいたくとみなされていまし



た。そうやって浮いたお金は、戦争に使われました。少しでもぜいたくなことをすると、「お前はそれでも日本人か。この非国民が！」とののしられ、人が人を監視する、とても息苦しい世の中でした。そして、初めは口で攻撃されていたのが暴力へとエスカレートし、命を奪われた人もいました。

当時の学校は、戦争ができる国民を育てるような教育が行われていました。例えば、女学校では竹槍で敵を殺す訓練が行われていました。

「鬼畜米英」という言葉を小学1年生から教えられ、敵に捕まってはならないと教えられていたため、戦争で崖まで追い詰められ、80mの高さから父親が娘を突き落とすようなこともありました。戦争中、「貴様の命は鳥の羽一枚より軽い」と言われ、命が粗末に扱われていました。そうして、310万人の日本人が戦争で亡くなりました。

- ② 長崎に原子爆弾が落とされたのは、(1) 1945年(2) 8月(3) 9日ですが、(1)～(3)を全て正解する日本人は、23%だそうです。広島はウラン、長崎はプルトニウムの原子爆弾が落ちましたが、威力は長崎の方が大きかったのです。防空壕にいと、怖くて夏でも震えました。いつも「今日で死ぬとかな？」という会話がなされていました。家の外で空襲警報が鳴ると、「家に帰ってくるな！」と言われていました。帰る途中で死ぬことがあったからです。長いときは半日も家に帰れないこともありました。8月9日は、本当なら鳴るはずの空襲警報が鳴らず、「敵機ー！」という声で、B29が来ていることを知ったのでした。通常は300人ほどいた城山国民学校の6年生は、原子爆弾によって、14人しか卒業できませんでした。
- ③ 被爆者の願いとは、二度と被爆者をつくらないということです。そして、核兵器ゼロを目指したいです。

- ④ こうした願いはかなえられると思います。それは、三つの理由からです。一つ目は世界の1割の国は戦争ができません。それは軍隊がないからです。二つ目はスイスやスウェーデンなど、200年以上軍隊を使って戦争をしていない国があるからです。三つ目は、核兵器禁止条約ができたことです。これにより、核兵器を使わない方向に向かうと考えられるからです。



Yさんの話を聞いて、やはり教育は大事だと思いました。人の命の大切さや人権の大切さを私たちは教えていかなければならないし、二度と戦争を起こさない、核兵器を使わないような世の中にしていかなければならないと感じました。

今回、修学旅行で学習したことを、今後の生活や生き方に生かしてくれたらと思います。

